



暮らしの  
知恵

川崎ゆきお

生活や暮らしぶりは人様々だ。そのため普遍的な話にはなりにくい。そこに共通するものはあるのだが、それを言い出すと抽象的になり、味気ない。やはり具体的なそのものの話題でない。

普遍性や共通性などは必要だろうか。話をそちらへ持って行く方が立派に聞こえるが、論が高すぎると、何も言っていないのに違い。

それ以前に、生活や暮らしぶりについて普段考えるだろうか。生活の範囲は広い。個人の暮らしと言っても、その中にはいろいろなものがある。一言では言えないほど多くの用事や動き方をしている。

「生活の知恵とか、暮らしの知恵なんかの本を読んだことはありますが、あらためて、そんなことを思うのは暇なんじゃないですか。仕事をこなすだけで一杯一杯です」

「でも、そういう本を読んだことはあるでしょ」

「小賢しい話でした」

「ほう」

「その後、知的生活の知恵という本を読みましたよ」

「よく読んでおられるじゃないですか」

「ベストセラーになったのか、本屋で積まれていたので、ついうっかりと」

「ほう」

「何を読んでいいのか分からないので、賢そうな本を選びました。お金を払うんだから、為になる本がよろしいでしょ」

「為になりましたか」

「知的生活って、言葉が私には合わなかったというか、知的生活なんてしていないのに、その知恵など何処で吹いている風なのか、思い当たりませんでしたなあ。私はねえ、本を読めば知的生活だと思っていましたから、よく読んでいるのですよ」

「はいはい」

「知的生産の技術って、本も読みました。知的生産って、技術なんですかねえ。そこらへんが小賢しくて、そんな小細工って、知的じゃないでしょ」

「ああ、はいはい。でも知的の範囲は広いですから」

「暮らし向きのはねえ、それをやっている人がプロですよ。誰も同じことをやっていないでしょ。朝起きてからやることは似ていても、やり方や順序が違う。また省略したり、よけいなことを加えたりもする」

「え、誰がプロですか」

「やっている本人が一番よく分かっている。創意工夫なんて、その人の好みですよ。癖ですよ。いくらいい話でも、私には合わなかったりしますからねえ。それに、その本の人より、私の暮らしぶりは私が一番よく知っている。だから、私の方がプロですよ。詳しくさにおいて」

「しかし、他人の知恵が役立つこともあるでしょ」

「一瞬はねえ。そうか、そういう方法もあったのかって、思うことはありますが、しかし、すぐにさめてしまいますなあ、運転していると。いつもの運転とは違い、最初は新鮮なんだけど、何

処かぎこちない。そのうち元の我流に戻りますなあ」

「しかし」

「はい、何ですか」

「普遍的な、一般的なことも大事でしょ」

「誰が」

「ああ、皆さんがです」

「私はみ皆さんではなく、田村ですよ」

「だから、田村さんも」

「も」

「いろいろな人に役立つと思うのですが」

「ああ、そういうこともあるだろうねえ」

「そうでしょ」

「それで？」

「はい、普遍性のある商品です。どなたにでも役立ちます」

「役立つが金があるだろ」

「あ、はい」

「それだけ前振りが大きいと、値段も比例して高いんだらうねえ」

「あ、はい」

「まあ、君の仕事を助けてやりたいけど、ここで売った分、君の給料になるの」

「なりません」

「じゃ、誰のお金になるの」

「会社のです」

「君がそれで助かるのなら、買ってあげてもいいけど、君は儲からんというのでは詮無い」

「いえ、成績が上がります」

「それだけではだめだよ」

「そうですか」

「それで君、その暮らしに役立つ、その商品、使っていないの」

「使っています」

「高いのに」

「サンプルを使っています」

「それで、生活や暮らしがよくなった？」

「あ、はい」

「じゃ、何でこんな胡散臭いセールス続けているの？」

「皆さんにお役立ちになりたいからです」

「私は皆さんじゃなく、田村だよ」

「その田村さんの暮らしにお役立ちになりたいと思ひまして」

「暮らしの改善ねえ。それって、札束をここに置いてくれれば、即改善だよ」

「ああ」

「君もだろ」

「そうですねえ」

結局、抽象的な話で、具体的な商品を出す前に、セールルマンは引き上げた。

了